

埼玉学園大学・川口短期大学 機関リポジトリ

# 高知市方言の上昇遅れと下降早まりについて

著者	高山 林太郎
雑誌名	埼玉学園大学紀要．人間学部篇
巻	19
ページ	1-11
発行年	2019-12-01
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1354/00001227/">http://id.nii.ac.jp/1354/00001227/</a>



# 高知市方言の上昇遅れと下降早まりについて

## The Delayed Rising and Hastened Falling of the Kochi City Dialect

高山 林太郎

TAKAYAMA, Rintaro

本稿は今日の高知市方言における上昇遅れ（低起式の後退変化）と下降早まり（下げ核の前進変化）を調査する。本調査の話者33名全員が1945年前後の生れである。第一に、上昇遅れに関しては有意な年齢差は見られなかった。第二に、4拍形容詞の下降早まりに関しては有意な年齢差が見られなかったにもかかわらず3拍形容詞の下降早まりに関しては見られた。第三に、上昇遅れに関して少なくとも3つの話者のグループ：古形専用グループ、新形専用グループ、新旧両形自由異音グループ、が存在することが確かめられた。

### 1. はじめに

本稿の目的は、高知市在住の高知県中央式方言出身話者33名<sup>1)</sup>を対象に調査し（時期：2017年8月まで）、低起式の上昇遅れ（上昇位置の後退変化）と下げ核の下降早まり（下降位置の前進変化）の共時態を解明し、上昇遅れと下降早まりの音変化としての性質の違いを明らかにすることである。なお本土祖体系から東京式への変化に際して必要と考えられている下げ核の下降遅れ（下降位置の後退変化）や低起式の上昇遅れからの語頭隆起によるくほみ式化は本調査のデータ内には認められない。本調査のデータは高山（2018）の付録に全て記載されているので、本稿では論に必要なデータのみ記載する。第2節では下原瑞恵氏（中井（1997）の話者）の詳細調査

データを記述し、上昇遅れ・下降早まりの全体像を提示する（高山（2017）を改訂）。第3節では、多人数調査の調査方法と使用する調査語について説明しつつ、調査結果を数値的に示し、適切な統計解析を行った上、その意味を解釈する。第4節では、それらのまとめと考察を述べる。

### 2. 下原瑞恵氏の上昇遅れと下降早まり

#### 2.1. “なまけ”について

中井幸比古（1997）『高知市方言アクセント小辞典』（原著だけでなく中井（2002）の電子データも参照した）と同じ話者（下原氏）を調査し、同辞典に記されている音韻現象の詳細な記述を目指す。小辞典には「低起式の上昇の1拍遅れ」（例：ウ[サギが～ウサ[ギが(兎)、ア[ルイチュ]ー～アルイ[チュ]ー（歩

キーワード：日本語諸方言、アクセント、後退変化、前進変化

Key words : japanese dialects, accent, regressive change, progressive change

いとる))と「下げ核の下降の1拍早まり」(例: [アカル]イ〜[アカ]ルイ (明)、[キルま]い〜[キル]まい (着))の現象が具体例として記述されている。これらの現象を下原氏は“なまけ”(下原氏による造語)と呼び、古い世代の発音に対する若い世代の発音であり、自分にとってより楽な発音であって、使用頻度が比較的高い発音であるとする。他方で、“なまけ”を起こさない発音(“非なまけ”)は、古い世代の発音であり、使用頻度が比較的低いが自分も使用し、特に強調を表す(=感情が籠る)場合によく選択される発音であるとする。音韻現象としては「低起式の上昇の1拍遅れ」と「下げ核の下降の1拍早まり」は全くの別物であるが、話者の心内辞書という共時的な体系内において占める通時的な地位が同様であることから下原氏はこれらをいずれも“なまけ”と呼ぶのであって、これらの音韻現象の通時的な位置付けを“なまけ”という造語は示している。本稿では下原氏が“なまけ”であると確かに内省した現象だけを取り扱っている。

## 2.2. 低起式の上昇の1拍遅れについて

「低起式の上昇の1拍遅れ」については、モーラ音素を含む語について見ると「イッ[コ(一個)、ア[ンキ〜アン[キ(暗記)、ギョ[ーギ〜ギョー[ギ(行儀)、サ[イショ〜サイ[ショ(最初)]のような上昇位置が下原氏にはありうる。「ア[ンキ、ギョ[ーギ、サ[イショ]も“非なまけ”として使うことがあるという点が小辞典の記述と一部異なる(自然談話を観察していてもモーラ音素から高くなる発音はよく耳にした)。また、「ア[ルイチュ]ー〜アルイ[チュ]ー(歩)、ハ[イッチュ]ー〜ハイッ[チュ]ー(入)、カ[カエチュ]ー〜カカエ

[チュ]ー(抱)]のように「1拍遅れ」の「拍」がモーラでなく音節または音節相当のものに該当するケースも少数ながら存在する。モーラ数の多い複合語などの場合には複合語内部境界などにまで“なまけ”が進みうる点は小辞典の記述通りである。従って「低起式の上昇の1拍遅れ」と言っても実際には共時的に2拍以上遅れている場合があり、この点は本土祖体系から東京式への変化を考える上で重要である(別稿で論ずる)。

## 2.3. 下げ核の下降の1拍早まりについて

「下げ核の下降の1拍早まり」は、形容詞・情態副詞など(例: [アカル]イ〜[アカ]ルイ(明)、(1) [カルガ]ルと〜[カル]ガルと(軽々)、(2) [オキた]い〜[オキ]たい(置)、(3) [キルま]い〜[キル]まい(着)、(4) [キリヤ]ー〜[キ]リヤ)で起こる現象である。形容詞について規則的に起こることは小辞典の記載通りであって、4拍以上の高起式のn拍形容詞にHn-1型とHn-2型が併用され、5拍以上の低起式のn拍形容詞にLn-1型とLn-2型が併用され、Hn-2型やLn-2型が“なまけ”に当たる。そのほか、「順接」(高く入れば高く付き、低く入れば低く付く)の有核の機能語が「低接」(必ず低く付く)に変化すること(例: エ[ーの]わ〜エ[ー]のわ(良: 伝統的な形式体言「が」とは別に共通語的な形式体言「の」も使用され、変化を被ったと考えられる)、(5) [ニワの]わ〜[ニワ]のわ(庭)、(6) [ニワよ]り〜[ニワ]より、(7) [ニワこ]そ〜[ニワ]こそ、(8) [ニワな]ら〜[ニワ]なら、(9) [ニワま]で〜[ニワ]まで、(10) [ニワら]ー〜[ニワ]らー、(11) [ニワさ]え〜[ニワ]さえ、(12) [ニワし]か〜[ニワ]しか、(13) [ニワや]ら〜[ニワ]やら、(14) [ニワな]り〜[ニ

ワ]なり、(15) [ニワで]も～[ニワ]でも、(16) [キルけ]んど～[キル]けんど (着)、(17) [キルま]で～[キル]まで、(18) [ザツな]ら～[ザツ]なら (雑)、(19) [ザツで]も～[ザツ]でも) も下原氏曰く“なまけ”であり、「下げ核の下降の1拍早まり」という大きな枠組みの中に取り込まれるものである。なお伝統的な形式体言「が」は「高接」(直前に下げ核があればそれを消去してでも高く付く)であり、例えば「[シ]ロイ (白)」に「が」わ」が付くと「[シロイが]わ」となるもので、有核ではあるが順接ではないので「下げ核の下降の1拍早まり」は起こさない。以下では番号(1)～(19)を振った現象を個別に見ていく。但し下降早まりに関するデータだけを挙げるので、上昇遅れも含む詳細は高山(2018)の付録を参照されたい。

### 2.3.1. 「[カルガ]ルと～[カル]ガルと (なまけ) (軽々)」等について (情態副詞)

情態副詞であり、高山(2013)で扱った「\*アカア[カ]と」の類に該当する。京都では平安末期の段階で早くも「\*[ピ]カピカと」の類に合流済みであるが、周辺の中央式の方言ではそうではない。高知市では「\*アカア[カ]と (平安末期相当) > \* [アカ]アカと (室町相当) > [アカア]カと > [アカ]アカと (なまけ)」のように、一旦下げ核の位置が3拍目に移動したあと2拍目に巻き戻ったと見られ(※東京や岡山市では「ア[カア]カと」で、3拍目に移動したまま)、下原氏が2種類の形を内省するのは通時的变化の前後の形をそのまま記憶しているものと考えられる。語例：[アオア]オと～[アオ]アオと、[アカア]カと～[アカ]アカと、[クログ]ロと～[クロ]グロと、[シロジ]ロと～[シロ]ジロと、…。

他方で、「[イ]ジイジと～[イジ]イジと (なまけ)」というのも一部の語彙に見られる。情態副詞であり、高山(2013)で扱った「\*[ピ]カピカと」の類に該当するが、規則的に併用する訳ではなく、H1型専用の語彙が大多数を占めるため、一部の語彙でH2型への合流変化を起こしていると見られる。つまりこれは下降早まりの例とは考えられない。なお“なまけ”は具体的な現象にかかわらず楽な発音(従って新しい発音)を指す下原氏の造語で、この場合はH2型の方が“なまけ”に該当するということである。

### 2.3.2. 「[オキた]い～[オキ]たい (なまけ) (置)」等について (動詞文節)

上述した形容詞の規則と同じである。語例：[キた]い (着)、[シた]い (為)、[ミた]い (見)、[キた]い (来)、[オキた]い～[オキ]たい (置)、[フミた]い～[フミ]たい (踏)、[カキた]い～[カキ]たい (書)、[ノミた]い～[ノミ]たい (飲)、[オリた]い～[オリ]たい (居)、[アケた]い～[アケ]たい (開)、[カエた]い～[カエ]たい (変)、[タテた]い～[タテ]たい (建)、[ナゲた]い～[ナゲ]たい (投)、[キザミた]い～[キザミ]たい (刻)、[ツナギた]い～[ツナギ]たい (繋)、[コガシた]い～[コガシ]たい (焦)、[サワギた]い～[サワギ]たい (騒)、ア[ルキた]い～ア[ルキ]たい (歩)、ハ[イリた]い～ハ[イリ]たい (入)、[シラセた]い～[シラセ]たい (知)、[ハジメた]い～[ハジメ]たい (始)、[アズケた]い～[アズケ]たい (預)、[アツメた]い～[アツメ]たい (集)、カ[カエた]い～カ[カエ]たい (抱)。

### 2.3.3. 「[キルま] い～[キル] まい（なまけ） （着）」等について（動詞文節）

形容詞の規則とほぼ同じで、n-1拍目に下げ核がある場合に変化が起こるが、低起式でも4拍語から変化が起きている。語例：[キルま]い～[キル]まい、[スルま]い～[スル]まい、ミ[ルま]い～ミ[ル]まい、ク[ルま]い～ク[ル]まい、[オクま]い～[オク]まい、[フムま]い～[フム]まい、カ[クま]い～カ[ク]まい、ノ[ムま]い～ノ[ム]まい、[オルま]い～[オル]まい、[アケルま]い～[アケル]まい、[カエルま]い～[カエル]まい、[タ]テルまい、[ナ]ゲルまい、[キザムま]い～[キザム]まい、[ツナグま]い～[ツナグ]まい、[コ]ガスまい、[サ]ワグまい、ア[ルクま]い～ア[ルク]まい、ハ[イルま]い～ハ[イル]まい、[シラセルま]い～[シラセル]まい、[ハジメルま]い～[ハジメル]まい、[アズ]ケルまい、[アツ]メルまい、カ[カエルま]い～カ[カエル]まい。

### 2.3.4. 「[キリャ] ー～[キ] リャ（なまけ） （着）」等について（動詞）

n-1拍目に下げ核がある場合に変化が起こり、その際に長音が消滅する場合がある。語例：[キリャ]ー～[キ]リャ、[スリャ]ー～[ス]リャ、ミ[リャ]ー～[ミ]リャ（※低起式が高起式に変わるケースもある）、ク[リャ]ー～ク[リャ]、[オキャ]ー～[オ]キャ、[フミャ]ー～[フ]ミャ、カ[キャ]ー、ノ[ミャ]ー、[オリャ]ー～[オ]リャ（一）、[アケリャ]ー～[アケ]リャー、[カエリャ]ー～[カエ]リャ（一）、[タ]テリャー～タ[テ]リャ（※類推変化と見られる）、[ナ]ゲリャー～ナ[ゲ]リャ、[キザミャ]ー～[キザ]ミャ（一）、[ツナギャ]ー～[ツナ]ギャ、[コガシャ]ー～[コガ]シャ（一）～[コ]ガシャ（一）、[サ]ワギャー～[サ]ワ

ギャ、ア[ルキャ]ー～ア[ル]キャ、ハ[イリャ]ー～ハ[イ]リャ、[シラセリャ]ー～[シラセ]リャ（一）～[シラ]セリャ（一）、[ハジメリャ]ー～[ハジメ]リャ（一）～[ハジ]メリャ、[アズケリャ]ー～[アズケ]リャ～[アズ]ケリャ（一）～[ア]ズケリャー、[アツメリャ]ー～[アツメ]リャ（一）～[アツ]メリャ（一）～[ア]ツメリャ（一）、カ[カエリャ]ー～カ[カエ]リャ（一）～カ[カ]エリャ（一）。

### 2.3.5. 「[ニワの] わ～[ニワ] のわ（なまけ） （庭）」等について（名詞文節）

形容詞の規則と同じで、n-1拍目に下げ核がある場合に変化が起こる。語例：[チの]わ（血）、[スの]わ（巢）、[ナ]のわ（名）、[ハ]のわ（歯）、[テ]の]わ（手）、メ[の]わ（目）、[ニワの]わ～[ニワ]のわ（庭）、[ミゾの]わ～[ミゾ]のわ（溝）、[ゴマの]わ～[ゴマ]のわ（胡麻）、[ヤマ]のわ（山）、[イ]シのわ（石）、ハ[リの]わ（針）、ア[メ]のわ～ア[メ]のわ（雨）、[コトリ]の]わ～[コトリ]のわ（小鳥）、[トコロ]の]わ～[トコロ]のわ（所）、[チ]カラのわ（力）、[イ]ノチのわ（命）、[ア]サヒのわ（朝日）、[アタ]マのわ（頭）、[ムス]メのわ（娘）、ツ[バ]キのわ（椿）、ク[ス]リ]のわ（葉）、ス[ズメ]の]わ～ス[ズメ]のわ（雀）。

### 2.3.6. 「[ニワよ] り～[ニワ] より（なまけ） （庭）」等について（名詞文節）

形容詞の規則とほぼ同じで、n-1拍目に下げ核がある場合に変化が起こるが、3拍文節から変化が起きている。語例：[血よ]り～[血]より、[巢よ]り～[巢]より、[名よ]り～[名]より、[歯よ]り～[歯]より、手[よ]り、目[よ]り、[ニワよ]り～[ニワ]より、[ミゾよ]り～[ミゾ]より、[ゴマよ]り～[ゴマ]より、[ヤマよ]

り、[イ]シより、ハ[リよ]り～ハ[リ]より、  
ア[メよ]り～ア[メ]より、[コトリよ]り～[コ  
トリ]より、[トコロよ]り～[トコロ]より、  
[チ]カラより、[イ]ノチより、[ア]サヒより、  
[アタ]マより、[ムス]メより、ツ[バ]キより、  
ク[ス]リより、ス[ズメよ]り～ス[ズメ]より。

### 2.3.7. 「[ニワこ] そ～[ニワ] こそ (なまけ) (庭)」等について (名詞文節)

規則は同上。語例も同上(「より」を「こそ」  
に変えただけ)。

### 2.3.8. 「[ニワな] ら～[ニワ] なら (なまけ) (庭)」等について (名詞文節)

規則は同上。語例:[血な]ら～[血]なら、[巢  
な]ら～[巢]なら、[名]なら、[齒]なら、手(一)  
[な]ら、目(一)[な]ら、[ニワな]ら～[ニワ]  
なら、[ミゾな]ら～[ミゾ]なら、[ゴマな]ら～  
[ゴマ]なら、[ヤ]マなら、[イ]シなら、ハ[リ  
な]ら～ハ[リ]なら、ア[メな]ら～ア[メ]なら、  
[コトリな]ら～[コトリ]なら、[トコロな]ら  
～[トコロ]なら、[チ]カラなら、[イ]ノチなら、  
[ア]サヒなら、[アタ]マなら、[ムス]メなら、  
ツ[バ]キなら、ク[ス]リなら、ス[ズメな]ら  
～ス[ズメ]なら。

### 2.3.9. 「[ニワま] で～[ニワ] まで (なまけ) (庭)」等について (名詞文節)

形容詞の規則とほぼ同じで、n-1拍目に下  
げ核がある場合に変化が起こるが、低起式で  
も4拍文節から変化が起きている。語例:[血]  
まで、[巢]まで、[名]まで、[齒]まで、手(一)  
[ま]で、目(一)[ま]で、[ニワま]で～[ニワ]  
まで、[ミゾま]で～[ミゾ]まで、[ゴマま]で～  
[ゴマ]まで、[ヤ]マまで、[イ]シまで、ハ[リ  
ま]で～ハ[リ]まで、ア[メま]で～ア[メ]まで、

[コトリま]で～[コトリ]まで、[トコロま]で  
～[トコロ]まで、[チ]カラまで、[イ]ノチまで、  
[ア]サヒまで、[アタ]マまで、[ムス]メまで、  
ツ[バ]キまで、ク[ス]リまで、ス[ズメま]で  
～ス[ズメ]まで。

### 2.3.10. 「[ニワら] ー～[ニワ] らー (なまけ) (庭)」等について (名詞文節)

「らー」は「なんか・たち」の意。形容詞  
の規則とほぼ同じで、n-1拍目に下げ核があ  
る場合に変化が起こるが、3拍文節から変化  
が起きている。語例:[血ら]ー～[血]らー、[巢  
ら]ー～[巢]らー、[名]らー～[名]らー、[齒  
ら]ー～[齒]らー、手(一)[ら]ー、目(一)  
[ら]ー、[ニワら]ー～[ニワ]らー、[ミゾら]ー  
～[ミゾ]らー、[ゴマら]ー～[ゴマ]らー、[ヤ]  
まらー、[イ]シらー、ハ[リら]ー～ハ[リ]  
らー、ア[メラ]ー～ア[メ]らー、[コトリら]ー  
～[コトリ]らー、[トコロら]ー～[トコロ]  
らー、[チ]カラらー、[イ]ノチらー、[ア]サヒ  
らー、[アタ]マらー、[ムス]メラー、ツ[バ]キ  
らー、ク[ス]リらー、ス[ズメラ]ー～ス[ズメ]  
らー。

### 2.3.11. 「[ニワさ] え～[ニワ] さえ (なまけ) (庭)」等について (名詞文節)

規則は同上。語例も同上(「らー」を「さえ」  
に変えただけ)。

### 2.3.12. 「[ニワし] か～[ニワ] しか (なまけ) (庭)」等について (名詞文節)

規則は同上。語例:[血し]か～[血]しか、[巢  
し]か～[巢]しか、[名]しか、[齒]しか、手(一)  
[し]か、目(一)[し]か、[ニワし]か～[ニワ]  
しか、[ミゾし]か～[ミゾ]しか、[ゴマし]か～  
[ゴマ]しか、[ヤ]マしか、[イ]シしか、ハ[リ

し]か～ハ[リ]しか、ア[メ]し]か～ア[メ]しか、  
[コトリ]し]か～[コトリ]しか、[トコロ]し]か  
～[トコロ]しか、[チ]カラしか、[イ]ノチしか、  
[ア]サヒしか、[アタ]マしか、[ムス]メしか、  
ツ[バ]キしか、ク[ス]リしか、ス[ズメ]し]か  
～ス[ズメ]しか。

### 2.3.13. 「[ニワや] ら～[ニワ] やら（なまけ） （庭）」等について（名詞文節）

規則は同上。語例も同上（「しか」を「やら」  
に変えただけ）。

### 2.3.14. 「[ニワな] り～[ニワ] なり（なまけ） （庭）」等について（名詞文節）

規則は同上。語例：[血な]り～[血]なり、[巢  
な]り～[巢]なり、[名な]り～[名]なり、[歯  
な]り～[歯]なり、手（一）[な]り、目（一）  
[な]り、[ニワな]り～[ニワ]なり、[ミゾな]り  
～[ミゾ]なり、[ゴマな]り～[ゴマ]なり、[ヤ]  
マなり、[イ]シなり、ハ[リな]り～ハ[リ]な  
り、ア[メな]り～ア[メ]なり、[コトリな]り  
～[コトリ]なり、[トコロな]り～[トコロ]な  
り、[チ]カラなり、[イ]ノチなり、[ア]サヒな  
り、[アタ]マなり、[ムス]メなり、ツ[バ]キな  
り、ク[ス]リなり、ス[ズメな]り～ス[ズメ]  
なり。

### 2.3.15. 「[ニワで] も～[ニワ] でも（なまけ） （庭）」等について（名詞文節）

規則は同上。語例も同上（「なり」を「でも」  
に変えただけ）。

### 2.3.16. 「[キルけ] んど～[キル] けんど（な まけ）（着）」等について（動詞文節）

n-2拍目に下げ核がある場合に変化が起こ  
る。語例：[キルけ]んど～[キル]けんど、[ス

ルけ]んど～[スル]けんど、ミ[ルけ]んど～  
ミ[ル]けんど、ク[ルけ]んど～ク[ル]けんど、  
[オクけ]んど～[オク]けんど、[フムけ]んど  
～[フム]けんど、カ[クけ]んど～カ[ク]けん  
ど、ノ[ムけ]んど～ノ[ム]けんど、[オ]ルけ  
んど、[アケルけ]んど～[アケル]けんど、[カ  
エルけ]んど～[カエル]けんど、[タ]テルけん  
ど、[ナ]ゲルけんど、[キザムけ]んど～[キザ  
ム]けんど、[ツナグけ]んど～[ツナグ]けんど、  
[コ]ガスけんど、[サ]ワグけんど、ア[ルクけ]  
んど～ア[ルク]けんど、ハ[イルけ]んど～ハ  
[イル]けんど、[シラセルけ]んど～[シラセ  
ル]けんど、[ハジメルけ]んど～[ハジメル]け  
んど、[アズ]ケルけんど、[アツ]メルけんど、  
カ[カエルけ]んど～カ[カエル]けんど。

### 2.3.17. 「[キルま] で～[キル] まで（なまけ） （着）」等について（動詞文節）

形容詞の規則とはほぼ同じであり、n-1拍目  
に下げ核がある場合に変化が起こるが、低起  
式でも4拍文節から変化が起きている。語例  
は同上（「けんど」を「まで」に変えただけ）。

### 2.3.18. 「[ザツな] ら～[ザツ] なら（なまけ） （雑）」等について（形容動詞文節）

規則は同上。語例：[ザツな]ら～[ザツ]な  
ら（雑）、[ス]キなら（好）、イ[キな]ら～イ[キ]  
なら（粋）、ウ[ブな]ら～ウ[ブ]なら（初）、[イ  
ビツな]ら～[イビツ]なら（歪）、[コマカな]  
ら～[コマ]カなら～[コマ]カなら（細）、[オ]  
ロカなら（愚）、ガ[サツな]ら～ガ[サツ]なら、  
ア[コ]ギなら（阿漕）。

### 2.3.19. 「[ザツで] も～[ザツ] でも（なまけ） （雑）」等について（形容動詞文節）

規則は同上。語例：[ザツで]も～[ザツ]で



も、[ス]キでも、イ[キで]も、ウ[ブで]も～ウ[ブ]でも、[イビツで]も～[イビツ]でも、[コマ]カでも、[オ]ロカでも、ガ[サツで]も～ガ[サツ]でも、ア[コ]ギでも。

#### 2.4. 上昇遅れと下降早まりの発生する範囲と性質

低起式の上昇遅れは品詞・語種を問わず、例外なく一斉に起こる純然たる音変化であると考えてよく、そうした考えに反するデータはこれまで得られていない（但し第3拍が特殊拍の場合（例：ド[タンバ]）に音変化が妨げられることはある）。他方で、上述のように下げ核の下降早まりは、文節全体として観察した場合に、「名詞文節、動詞文節、形容詞、形容動詞文節、情態副詞」という幅広い内容語において観察され、文節から機能語を切り離して観察した場合に、元は順接の有核の機能語が規則的に低接に変化するという形で観察される。つまり下げ核の下降早まりも規則的な音変化であると一応言うことはできるが、細かく見ると、形容詞における規則を典型として見た場合に、若干異なる場合が頻繁にある。「高起式では4拍文節から、低起式では5拍文節から変化が起きる」という形容詞の原則に対して、高起式・低起式ともに4拍文節からだったり、3拍文節からだったりする。語彙的条件によって音変化の姿が異なるとなると、下げ核の下降早まりを純然たる音変化とは見なしがたいということになる。次節では多人数調査の結果を分析するが、本節におけるこの結論を支持するデータが得られる。

### 3. 高知市在住の話者の多人数調査とその結果の分析

2017年8月、下原氏宅に宿泊し、高知市シルバー人材センターに通って各人1時間程度の多人数調査を高知市在住者41名に対して実施した（即ち話者総数42名）。そのうち高知市出身者は24名、非高知市出身者のうち高知県中央式方言出身者は9名、高知県非中央式方言出身者は9名だった（42名全員の体系と系統が分かるような名詞・形容詞の類別語彙調査を実施した上で、それに組み込む形で本稿の調査も実施している）。本稿の話者は中央式に属する33名である。下原氏と同様の詳細な調査を多人数で実施することは時間的に困難であり、要点のみの調査とした。何が要点であるかは下原氏のデータに基づき調査者が熟慮の上選定した。

本稿と同じ問題を扱っている先行研究として、下村（1970、1971）、吉岡（1979）がある。また、低起式の上昇遅れに関して、平山（1963）に「10才代の小中学生などでは、【略】○○○型〈尾高〉にしているものさえある」とあり、2017年現在では64～73歳に該当する。つまり低起式の上昇遅れは終戦（1945年）頃から後に生れた世代の現象ということになる。すると終戦前後で年齢差がくっきり現れても不思議ではないが、果たしてどうか。これらの先行研究と比べて本稿が新しい点は、第一に、上昇遅れ・下降早まり共に音変化の途上にある下原氏の共時的体系を入念に調査したので（前節）、各品詞における音変化前後の状況が詳細に判明した点にある。第二に、終戦前後生れの老年層に限定し（話者の選定を高知市シルバー人材センターに任せたため結果的に終戦前後生れが調査対象となった）、



高知市在住者である高知市方言話者24名と高知県中央式方言出身話者9名のデータを統計分析（t検定など）したところ、低起式の上昇遅れについて年齢差が認められないという予想に反する結果が得られ、下げ核の下降早まりに関して年齢差が認められるという興味深い結果が得られた点にある。

低起式の上昇遅れと下げ核の下降早まりの計測は次のように実施した（表1）。

表1の「話者」は01から33までの話者番号、「年齢」は各々の調査時の年齢を表す。

表1 調査データ

話者	年齢	Adj 上遅	N 上遅	Adj 下早	のわ 下早	Adj 1型
01	71	0.5a	0.5a	0.5a	0.5a	0
02	72	1	0.5a	0.5c	0.5b	0
03	65	0.5a	0.5b	0	0.5c	0
04	73	0	0	0	0	0
05	74	0.5c	1	0.5a	0	0
06	68	0	0.5a	0.5c	x	0.5c
07	69	1	1	0.5c	0	0
08	73	0	0	0	x	0
09	70	1	0.5a	0.5a	0	0
10	73	1	1	0	x	0
11	75	1	0.5a	0.5a	0.5a	0
12	75	0.5a	0.5a	0	0.5a	0
13	77	1	0.5a	0.5a	0.5a	0
14	71	0	0	0.5c	0.5b	0
15	73	0	0.5a	1	x	0
16	73	1	1	1	1	1
17	71	1	1	0.5c	0.5a	0
18	73	1	0.5a	0	0.5c	0
19	64	1	1	1	0.5c	1
20	69	1	1	1	x	0
21	73	1	1	1	0.5c	0
22	73	0.5a	0	0	x	0
23	76	1	1	0.5a	0.5c	0
24	68	1	0.5c	0.5a	0.5b	0
25	68	1	0	1	0.5c	0.5c
26	69	1	0.5b	1	1	0.5c
27	66	0	0	0.5c	x	0.5c
28	66	0.5a	0.5b	0.5a	0.5b	0
29	79	0	0	0.5a	0.5a	0
30	66	0.5c	0	0	1	0
31	69	0	0	0	x	0
32	74	1	1	1	1	0
33	69	0	0	1	0	0

表1の「Adj上遅」は、4拍低起式形容詞が早上がり（例：オ[イシ]イ）なら「0」、上昇遅れ（例：オイ[シ]イ）なら「1」、中間的な状態（併用、拍数による違い、語彙による違い）なら「0.5」とする（表1では併用を「0.5a」、拍数による違いを「0.5b」、語彙による違いを「0.5c」と厳密に表示する、以下同様）。調査語：おいしい、おやすい、しんどい、ちゃいろい。

表1の「N上遅」は、低起式無核の「2拍名詞+が」や3拍名詞が早上がり（例：フ[ネが、ス[ズメが）なら「0」、上昇遅れ（例：フネ[が、スズ[メが）なら「1」、中間的な状態なら「0.5」とする。調査語：針が、船が、勘が、雀、兎、雀が、兎が。

表1の「Adj下早」は、4拍高起式形容詞が遅下がり（例：[アカル]イ）なら「0」、下降早まり（例：[アカ]ルイ）なら「1」、中間的な状態なら「0.5」とする。調査語：あかるい、あやしい、うるさい、うれしい。

表1の「のわ下早」は、「無核名詞+のわ」が「の[わ]」（例：[ニワの]わ）なら「0」、[のわ]」（例：[ニワ]のわ）なら「1」、中間的な状態なら「0.5」とする。標準語的な形であるため話者によってはデータが取れず、「x」（データ無し）とした。なお本来の方言形は「のが[わ]」（例：[ニワのが]わ）で、こちらも並行して多人数調査したが、既述の通り「高接」であって「順接」ではないため、下降早まりは起こしていなかった。調査語（無核名詞）：血のは、戸のは、巣のは、手のは、目のは、庭のは、水のは、上のは、溝のは、胡麻のは、晩のは、針のは、船のは、勘のは、小鳥のは、所のは、雀のは、兎のは。

表1の「Adj1型」は、3拍形容詞がほぼ2型なら「0」、ほぼ1型なら「1」、中間的な

状態なら「0.5」とする。調査語:「アツ」イ(厚)、  
「ア」ツイ(熱)等3拍語101語。

本調査では併用か専用かは重要な違いであるため、話者が調査票を一通り読み上げたあと、邪魔にならないタイミングを見計らって併用の可否を必ず質問している。そして、併用可と答えた場合は、実際に発音していただいて、発音の自然さを調査者が評価して最終的に判断している(発音してみてもやはり併用不可だったと自分から回答を変えるケースもあった)。従って本調査の「0」、「0.5」、「1」というグループ分けは厳密なものである(但し「0.5」は併用だけでなく拍数・語彙による違いのケースも含んでいる)。統計分析では、「中央式方言話者であれば人数を増やす為に算入する方法」(33名)と、「高知市出身者に限る方法」(24名)をいずれも実施したが、結果はほとんど変わらなかったもので、前者の分析結果のみ示す。表1の「年齢」(調査時)の平均は71.06歳で、64歳1名、65歳1名、66歳3名、68歳3名、69歳5名、70歳1名、71歳3名、72歳1名、73歳8名、74歳2名、75歳2名、76歳1名、77歳1名、79歳1名だった。

表1の「Adj上遅」は「0」が9名(平均71.22歳)、「0.5」が7名(平均70歳)、「1」が17名(平均71.41歳)であり、可能なグループ分け(「0」と「0.5」間、「0.5」と「1」間、「0または0.5」と「1」間、「0」と「0.5または1」間の4通り、以下同様)について母平均の差の検定(t検定)を実施したところ年齢に有意差は見られなかった。

表1の「N上遅」は「0」が10名(平均70.7歳)、「0.5」が13名(平均70.92歳)、「1」が10名(平均71.6歳)であり、可能なグループ分けについてt検定を実施したところ年齢

に有意差は見られなかった。

表1の「Adj下早」は「0」が9名(平均71.11歳)、「0.5」が15名(平均71.53歳)、「1」が9名(平均70.22歳)であり、可能なグループ分けについてt検定を実施したところ年齢に有意差は見られなかった。

表1の「のわ下早」は「0」が5名(平均71歳)、「0.5」が16名(平均71.5歳)、「1」が4名(平均70.5歳)であり、可能なグループ分けについてt検定を実施したところ年齢に有意差は見られなかった(ここで「高知市出身者に限る方法」を取ると、「0」の話者が1名となりt検定が実施不能となる。「中央式方言話者であれば人数を増やす為に算入する方法」との違いはこの点のみである)。

表1の「Adj1型」は「0」が27名(平均71.74歳)、「0.5」が4名(平均67.75歳)、「1」が2名(平均68.5歳)であり、可能なグループ分けについてt検定を実施したところ、「0」のグループと「0.5または1」のグループ(平均68歳)との間で、 $p = 0.0189 < 0.05$ 水準で年齢に有意差が見られた(平均年齢差3.74歳)。なお正規性の検定を実施したところ、「0」のグループはシャピロ・ウィルク検定で $p = 0.7826 > 0.05$ 、コルモゴロフ-スミルノフ検定で $p = 0.6033 > 0.05$ 、「0.5または1」のグループはシャピロ・ウィルク検定で $p = 0.6643 > 0.05$ 、コルモゴロフ-スミルノフ検定で $p = 0.0641 > 0.05$ であり、正規分布に従うと分かった。また等分散性の検定を実施したところ、 $p = 0.8727 > 0.05$ となり等分散であると分かった。正規分布かつ等分散であるためt検定を実施してよい。

#### 4. 結果のまとめと考察

下原氏を調査した結果(中井(1997)も含

む)、低起式の上昇遅れが品詞・語種を問わず例外なく一斉に起こる純然たる音変化であると確かめられたと考える。少なくともその考え方に反するデータは得られていない（但し第3拍が特殊拍の場合（例：ド[タンバ]）に音変化が妨げられることはある）。多人数調査では平山（1963）の記述から予想されることに反した結果が得られた。即ち、今回調査した終戦前後生れの世代においては、早上がりから上昇遅れへの音変化は個人差のレベルの現象であって、年齢差という形で現れるものではなかった。平山（1963）の観察が外れていた、つまり年齢差を生じる境界線は（終戦時でなく）もっと上にあった可能性もあるし、いわゆる成人後採用によって境界線自体が上昇したという可能性も考えられる。いずれにしても今回調査した話者より上の世代を更に調査しなければ年齢差は出ないと考えられ、今後の課題と言えるが、中井幸比古先生から伺った話によると、そのような世代では早上がりの発音で安定していることは実際の調査で確認しているとのことである。

下げ核の下降早まりについては、4拍形容詞「[アカル]イ>[アカ]ルイ」、3～5拍名詞文節「[ニワの]わ>[ニワ]のわ」という変化について多人数調査で年齢差が出なかった一方、3拍形容詞「[アツ]イ>[ア]ツイ」という合流変化については多人数調査で約4年という年齢差が現れ、今回調査した話者の中でも比較的若い層の特徴であることが判明した。形容詞で4拍語より3拍語の方が遅れて変化が始まっているということは、拍数もしくは弁別性の条件によって音変化の姿が異なっているということである。そして下原氏個人の詳細調査でも語彙的条件によって音変化の姿が異なっていたので、やはり下げ核の下降早

まりを純然たる音変化とは見なしがたいという結論になる。長期的に見れば純然たる音変化と同様の結果を生じるとしても（例：京都・大阪で規則的に生じた「昇核」現象（中井幸比古の用語で、H2型のH1型への合流等を指す）、例えば「[オト]コ>[オ]トコ（男）」）、短期的に見れば純然たる音変化とは振る舞いが異なっている、その微妙な差異を捉えたことになる。なお筆者は高知市出身在住の或る小学生が「男」を「[オト]コ」と発音し「[オ]トコ」と発音しないことを内省調査で確認しており、3拍名詞での「昇核」現象もまた高知市ではかなり遅れて発生することが予想される。

純然たる音変化である低起式の上昇遅れとそうではない下げ核の下降早まりのいずれについても、旧形専用グループ、新形専用グループ、新旧両形併用または拍数・語彙による違いのグループ（以下「併用グループ」と略す）の3つの話者グループに厳密に分類できることが分かった。ここで重要なのは、純然たる音変化である低起式の上昇遅れといえども併用グループが存在することが確かめられたという点である。筆者との自然談話を観察した結果、下原氏が低起式の早上がりと上昇遅れの発音をいずれも自然に言語生活の中で使用しており、自由異音において語気の強い場合とそうでない場合で例えば破裂性の有無が変わったりすると同様に、語気の強い（＝感情が籠る）場合に早上がりの発音が見られることが判明していたので、下原氏の低起式の早上がりと上昇遅れの発音は自由異音の一種と見てよいと考えるが、低起式の早上がりと上昇遅れの併用グループのうち「拍数・語彙による違い」を除く厳密な「新旧両形併用」のグループについては、下原氏と同様の自由

異音の状態（「新旧両形自由異音グループ」）であると考えられる。

### 〔注〕

- 1) 筆者による本研究の調査にご協力下さった高知市在住の皆様、に、厚く御礼申し上げます。その芳名を右に記す（調査実施順、敬称略、「n. 姓名（西暦）」は話者番号と生年。姓名を記すことを承諾された方のみ姓名を記す）。原則高知市生え抜きで、生え抜きでない場合はその旨を必ず注記した。
01. 下原瑞恵（1946）、02. 川村寿美（1945）、03. 下司孝（1952）、04. 匿名男性（1944；伊野町）、05. 国繁昌子（1943；伊野町）、06. 田中修二（1949）、07. 中村昂子（1947）、08. 杉山和弘（1944）、09. 澤村佐代子（1946；土佐山田町）、10. 匿名女性（1943；佐川町）、11. 大崎龍秀（1941）、12. 山本学（1942；香南市）、13. 安岡信江（1940）、14. 匿名男性（1945）、15. 川江守彦（1944）、16. 匿名女性（1944）、17. 坂野耕一（1946）、18. 岡村駿（1943）、19. 安藤恭子（1953）、20. 森下正一（1947；大豊町穴内）、21. 五百蔵亮（1943）、22. 山地保雄（1944）、23. 匿名女性（1941）、24. 武田末子（1949；須崎市）、25. 匿名女性（1949）、26. 秦道子（1947）、27. 立仙貴俊（1950）、28. 矢野修一（1950）、29. 徳弘良文（1938）、30. 匿名男性（1950）、31. 藤川節（1948；馬路村）、32. 天野恵美（1942）、33. 平田律子（1948；土佐市）。

### 参考文献

- 下村泰子（1970）「高知方言のアクセント―尾高型アクセントを中心に―」『方言研究の問題点』199-212. 東京：明治書院。
- 下村泰子（1971）「高知県安芸郡甲浦方言のアクセントと高知市方言アクセントの比較考察」『人文学報』80: 1-12. 東京：東京都立大学人文学部。
- 高山林太郎（2013）「日本語諸方言の四モーラ豊語を比較する試み」『東京大学言語学論集』34: 143-183. 東京：東京大学言語学研究室。

- 高山林太郎（2017）「高知市方言の上昇遅れと下降早まり」『第31回日本音声学全国大会予稿集』13-18. 口頭発表、東京、2017年9月30日。
- 高山林太郎（2018）『タッスイのッとは何か』高知：リーブル出版。
- 中井幸比古（1997）『高知市方言アクセント小辞典』神戸：私家版。
- 中井幸比古（2002）『京阪系アクセント辞典』東京：勉誠出版。
- 平山輝男（1963）「高知アクセントについて」『音声学会会報』114: 8-10.
- 吉岡美代（1979）「アクセントの個人差の実態 高知市薊野における年層別調査から」『高大国語教育』27: 10-18. 高知：高知大学国語教育学会。